
The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFMSM)

Official Journal of the Japanese Society of Physical Fitness and Sports Medicine

Volume 13, Number 1 January 25, 2024

CONTENTS

Regular Articles

Relationship between school sports club membership and depressive symptoms among new recruits of the Japan Self-Defense Force: A longitudinal study

T. Kobayashi, S. Ukawa, T. Kimura, K. Shido and
A. Tamakoshi 1

Characteristics of youth sports specialization among Japanese baseball players

R. Fuke, Y. Kohmura and K Aoki 9

Assessment of adverse events and near misses during voluntary community-driven sports activities by community residents: a cross-sectional study

A. Hirata, Y. Oguma and T. Hashimoto 19

Abstracts

The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine (JPFMS)

Vol. 13, No. 1 January 2024

Regular Articles

陸上自衛隊の新入隊員における高校時代の運動部活動が入隊後の抑うつ症状に及ぼす影響：縦断研究による検討 (p. 1-7)

¹酪農学園大学農食環境学群, ²大阪公立大学大学院生活科学研究科, ³北海道大学大学院医学研究院公衆衛生学教室, ⁴日本医療大学総合福祉学部

小林 道¹, 鶴川重和², 木村尚史³, 志渡晃一⁴, 玉腰暁子³

思春期における部活動の経験と社会人になった後の成人期の抑うつ症状との関連は明らかになっていない。本研究の目的は、陸上自衛隊の新規採用隊員を対象に、高校時代の部活動の経験とその後の抑うつ症状の関連を明らかにすることを目的とした。2013年の4月に陸上自衛隊に入隊した18~27歳の男性925名を対象にベースライン調査を実施した。高校時代の部活動は、運動部、運動部以外、所属無しに分類した。抑うつ症状は、the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D)日本語版を用いて、20項目の合計値によるCES-D得点を算出し、抑うつ症状を評価した。2回目の調査は2か月後の2013年6月に実施した。高校時代の部活動とベースラインから2か月後のCES-D得点の変化との関連について、年齢、ベースラインのCES-D得点、運動習慣、喫煙習慣、飲酒習慣、睡眠時間、朝食習慣の要因で調整した共分散分析によって検討した。その結果、運動部の経験者と比較したCES-D得点の変化の平均値(95%信頼区間)は、運動部以外の部活動経験者: 3.90 (2.22-6.71)、部活動の所属無し: 2.24 (0.20-2.94)と、CES-D得点の平均値が有意に増加した。高校時代に運動部の経験がない新入隊員は、運動部の経験がある新入隊員よりと比較して、抑うつ症状を発症するリスクが高くなることが明らかとなった。本研究の結果は、自衛隊などの職業におけるうつ病リスクの早期発見に役立つ可能性がある。

日本の野球選手における専門化の特徴について

(p. 9-17)

¹順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科, ²順天堂大学スポーツ健康科学部

福家瑠都¹, 河村剛光², 青木和浩¹

本研究では、日本の大学野球選手の競技経歴の特徴を明らかにし、競技経験と競技レベル及び障害発症との関連性を分析した。全日本大学野球連盟加盟チームに所属する選手589名を対象にインターネットによるアンケート調査を実施した。質問項目は、野球を始めた年齢、野球以外の競技経験、各年代における野球の最高成績、使用球、障害発症、競技レベルなどとした。競技経験と各年代の競技レベル及び障害発症との関連性について χ^2 検定を実施した。調査への参加に同意を得た回答者は541

名であった。調査の結果、野球を始めた平均年齢は 7.8 ± 1.8 歳、野球に専門化した平均年齢は 10.0 ± 3.2 歳であった。 χ^2 検定の結果、競技経験と大学での競技レベルについて、有意な関連性が認められた($\chi^2=8.83$, Cramer's $V=0.133$, $p<0.05$)。12歳以前で専門化し野球以外の種目経験がある選手の群で、競技レベルが高い傾向があり、13歳以降で専門化し野球以外の種目経験がある選手の群では、競技レベルが低い傾向があった($p<0.05$)。競技経験と障害発症については、有意な関連性は認められなかった。本研究の結果から、幼少期のスポーツ経験が大学野球選手の競技レベルに影響を与える可能性があり、また日本の大学野球選手は、早期専門化の傾向にあることが明らかとなった。

地域住民が主体的に実施するスポーツ活動中の有害事象やヒヤリハットの評価：横断的研究 (p. 19-31)

¹日本学術振興会, ²慶應義塾大学スポーツ医学研究センター, ³慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科
平田昂大^{1,2,3}, 小熊祐子^{2,3}, 橋本健史^{2,3}

身体活動・運動は、健康上の利点が数多くある一方で活動中には傷害や転倒などの有害事象およびヒヤリハットが発生している。本研究では、地域住民が主体的に実施する身体活動・運動中に発生した有害事象およびヒヤリハットの発生状況を明らかにすることを目的とした。調査方法は、6つの公共スポーツ団体・公共スポーツセンターの運動指導者または運動支援者を対象にオンラインアンケートを実施した。オンラインアンケートでは、過去3年間以内の有害事象・ヒヤリハットについての経験を尋ね、想起法を用いて報告を得た。報告された有害事象・ヒヤリハットについては、スポーツ種目、発生時期、関係者の性別・年齢をもとに重複報告がないかどうか確認した。オンラインアンケートの回答者は108名で、男性60%、女性40%であった。50-69歳の回答者が全体の60%を占めた。回答者の運動指導者・運動支援者としての活動は、ほとんどが月1回、1回の活動時間は1-2時間で、有害事象は45件報告された。有害事象の内訳は、けが26件、転倒13件、その他(熱中症、めまい、意識障害など)6件であった。また、ヒヤリハットは24件報告され、その内訳は、人や物と衝突しそうになった12件、転倒しそうになった5件、その他7件だった。この結果から、回答者の約30%が有害事象を経験していることがわかり、有害事象の記録を残す、安全対策の実施、運営スタッフへの適切な安全教育の必要性が示唆された。